日☆本☆一☆の☆陶☆石☆に☆育☆つ

天草の窯を訪ねる

＊天草の西海岸、都呂々、下田、高浜あたり一連の山々には、無類の良質をほこる陶石が出る。全国の陶業地が競つてこれを求め、製品の改善に努めていることは周知のとおりである。この優秀な〃天草陶石〃が、当の地元ではどう生かされているか。その実態にメスを入れて今後の方向を考えたい。

水の平焼

三百年の伝統……★

水ノ平（みずのたいら）焼の由来書を見ると

〃古来我が天草は全国唯一の陶石原産地として広く世人に知らるゝ所、創業は遠く三百年の昔なるも系統明ならず〃云々

とある。三百年といえば、加藤清正が朝鮮役から連れ帰つた、陶工によつて創められたと伝えられる高田焼あたりと、同系統かという説もある。そうでなくても本誌前号の土産品の記事にあつた、日奈久の高田焼窯元山下唯彦さんは、今度訪ねた水ノ平の窯元岡部源四郎さんの家で、土をこねた人だというから、両者の因縁はなか〳〵深い。

明和二年、当時の窯元山川徳蔵から業を継いだ岡部常兵衛が現岡部氏の祖。

このあたりが水ノ平という地名なのでそのまゝ製品の名とした、したがつてミズノタイラが本当でスイヘイヤキではない。

当代源四郎翁はもう八十二才だという仕事はすつかり長男の久万作さん（四九）に譲つているが、研究心は少しも衰えていない。

〃こゝは山あいで風が当らんので、窯をすえるには好都合です、おかげでこの間の台風も丁度火入れの時でしたが無事にすみました〃

父の富次郎氏は絵画もうまく象嵌（ぞうがん）法による山水の花瓶なども現存しているが、源四郎翁は絵よりも色の改良を志し、明治二十九年に現在のようなナマコ色の焼付に成功、爾来今日まで水ノ平といえばあの紫褐色を基調とした支那風の海鼠焼ということにきめられているようだ。前記富次郎氏の作品を見るとそれまでの焼色は青灰色で、それに白線の模様がつくと全く高田焼に酷似している。

源四郎翁は明治三十六年に佐賀県立有田工業学校に入学して更に研鑽を積み、有田焼の技法なども取入れて改良に苦心した。

明治十年の賞状……★

近くの山仁田という部落で掘出したという細長い無地の花瓶は、暗褐色の雑描なものだが、この辺一帯キブシとかガイロメとかいつている白粘土が豊富で、水ノ平ではこれに都呂呂村の木山陶石を加えている。

製品は茶器・食器・酒器・容器・花瓶・床置・植木鉢等々あらゆる種類にわたつている。

筆者が訪ねた時にも縁側には数十本のカン瓶が並んでいた。鷺鳥が仰向いたかつこうのもので、何だかどこでも見たような気がする。

どこでも見たといえば、天草名産のウニの容器はこゝの専門といつてよく、明治三十六年、つまり有田工業入学の頃牛深の元川嘉八郎（塩屋）という海産物屋の注文で創作、当時の大阪勧業博に出品して賞状を得た。

ウニがつきると空の容器を箸立や一輪ざしに利用されるというのがミソで、当時のは首の長いものだつたが、その後現在の形に改良された、もつともアケビの蔓は当時のまゝだという。

賞状のはしりは明治十年、西南役の頃にさかのぼるのだから古い。当時の内国勧業博で得たもので出品は植木鉢、作者は祖父の弥四郎氏、審査官長は前島密で内務卿従三位大久保利通の名がデンとすわつているという大時代なもの。

文面には「高田焼ト同種ニシテ細嵌ノ趣モ亦類似ス白嵌ハ色少シク淡シト雖モ画紋製状自カラ雅趣アリ且価廉ナルモノ勉励ノ効アリトス」とある。

その他にも欄間には賞状がズラリと並んでいるが、異色のあるのは一九一〇年ロンドンで開かれた日英博の賞状や、昭和五年時の県知事大森吉五郎の名で贈られた産業功労者としての賞状で、これは源四郎翁のもの。

資性温厚篤実とか献身的努力とか、海鼠色釉薬（ウワグスリ）の発明とかいう文字が見える。

将来性は新風から…★

水ノ平焼は、現在年十八回位窯の火入れをするが、人夫数人の外は久万作さん一人、製品も十年一日の如くナマコ色の厚焼で、なじみは深く堅牢でもあるが新味には欠けるようだ。

そこに時代の好尚から取残される恐れはないか。もつとも前記のウニ容器や、二〜七月に最盛季となるタコ壺の注文などで、一家の経営には十分であろうが、折角三百年の伝統をもつて売込んだ古いノレンを、更に発展させるにはもう一歩のふみ込みがいろう。

来年の国体を前に土産品のことを話題にすると、久万作氏はキリシタンの踏絵や教会堂を薄彫りにした、一輪ざしや魔除けの鈴を見せた。焼きも青灰色や白色で若い世代向きを狙つているが、同種のデザインで絵やレリーフの壁かけなどはどうであろうか。

国体に来る青年層には、そうしたものの方がアツピールするのではないかと思われる。とにかく何かの新風を吹きこむことは、単に国体を相手としてのみならず、水ノ平の販路を現在の県単位から、全国的に飛躍させるキーポイントであろう。

もちろん伝統のなまこ焼も一そう盛んにつくるとして……。

広山焼

創業五年の新進…★

広山焼（こうざんやき）の名はまだ耳新しい。本渡発手野経由富岡行のバスで行く水ノ平と対照的に、鬼池経由で行く広瀬がその窯場。どちらも本渡の市街から一とまたぎで行けるところが一つの長所ともいえる。

広山焼のしおりによると

〃天草の西海岸に産する陶石はその質極めて優秀で本邦陶磁器の生産に欠く事の出来ないものであることは周知の通りであります。天草陶苑はこの天下優秀の天草陶石を主原料とする郷土陶芸品の創作を目指して〃云々

とあつて、これまた天草陶石の優秀性が、原動力となつていることがわかる。

創業五周年というから、もちろん戦後派中の戦後派、その点も水ノ平の三百年とは対照的だ。

もともとこゝは土管製造が本業で、その方は明治初年の創業、これは今も県内一円に売出して業運いよいよ盛大である。三代目の小川富彦氏（広山）は有田工業の出身で、かねてから陶磁の製作に意欲をもやしていたところ、たま〳〵昭和三十年の天草博に際してカツパ人形やマリヤ像などの壁かけを試作、土産品として売出したところ、案外の好評だつたので、いよ〳〵意を決して本格的に製作をはじめた。

折よく三十一年には甥の小川哲男さん（漫画家と同姓同名だ）がこれも有田工業を出て、京都の日展陶芸家森野嘉光氏に師事した後帰郷したので、早速スタツフに入れて製作を強化今日に至つたものである。〃広山とは広瀬の山ということでしよう〃と、病気入院中の富彦氏に代つて哲男さんが注釈をつけた。なるほど堀割のバス道路を挟んで両側は山になつており、窯場としては好適の地だ。

若い世代への魅力…★

丁度窯を出したばかりの製品が、縁側に一ぱいひろげられている。ここのは小物ばかりで、中でもタコ壺にタコが入ろうとしている図柄の楊子さしが、数百個並んでいるのは盛観、その他には当苑自慢のカツパの置物、小型のは若い人たちの机上に歓迎されそうなユーモラスな作品。いずれも小売五十円程度のもので、さし当り来年の国体あたりにはもつてこいの土産品である。

小型といえば豆盆栽の鉢が目についた。大都市でももちろん熊本あたりでもいわゆる団地族はふえる一方だが、そこの住人は土に飢え花卉に飢えるあまり小型盆栽に目をつけて、東京などでは爆発的な流行を来たしている。

この鉢はその注文に応ずるもので、先ごろ県の東京物産館に試作品を送つたところ、忽ち売切れの盛況を見せたという。

（次頁三段へ）

水ノ平焼の窯（本渡市水ノ平にて）